

## 日本美術の入口―赤羽末吉の絵本

執筆者 上島史子

掲載誌 「子どもの本棚」二〇二〇年十二月号

赤羽末吉の生誕百十年を記念する展覧会が十月三日から静岡市美術館で開幕した。会場に並んだ初期から晩年までの絵本の原画見ながら、赤羽末吉の原画の美しき、表現の幅の広さに改めて感じ入った。

赤羽末吉は絵本を描くとき、主に墨や顔彩などの日本画の画材を用いている。「日本画」という言葉は、明治時代に西洋画が日本に入ってきたときに、日本に伝わる画材を用いた絵画を区別するために生まれた言葉で、それまでは狩野派や土佐派、浮世絵、南画などさまざまな流派で呼ばれていた。

日本画は画材の扱いが難しく、習得するのにはかなりの修練を必要とする。赤羽が最初に日本画を学んだのは十八歳のころ、帝展（今の日展）系の日本画家について見習いをしたときだという。だが、席画会で掛け軸にする絵を何枚でも同じように描くのを見て自分には向かな

いと感じ、一年ほどで門を出てしまう。

本格的に日本画を描き始めたのは旧満州（中国東北部）にいたところで、絵描きの仲間に出会い、切磋琢磨しながらほぼ独学で習得した。満州国美術展覧会に出品するようになり、一九四〇年からは大作の屏風で三年連続特選賞を受賞している。彼の地で画家として生きていく決意を固めていたが、日本が第二次世界大戦に敗れ、一九四七年にやむなく引き揚げることになった。

赤羽が最初の絵本『かさじぞう』を発表したのは一九六一年、五十歳のときだった。十五年間いた中国東北部から日本に帰り、赤羽はまず湿潤な風土の美しさに魅せられたという。特に雪国は中国にいたところからの憧れであり、生活が落ちつく、毎年のように通い、深い雪の風景やそこにくらす人々、伝統行事などを写真やスケッチで記録した。赤羽にとって雪国はまさに水墨画の世界であり、スケッチをもとにした水墨の習作も多く描いていて、『かさじぞう』を水墨で描くことは自然な成り行きだった。水をたつぷりふくんだ墨線は、雪の湿り気とともに、雪国の人たちの人情のあたたかさも伝え、まさにこの民話の心を伝えている。

翌年発表された『だいくとおにろく』は、モノクロとカラーの頁を交互に使うという印刷の制約があったが、墨絵と大和絵風の絵を使い、かえってドラマを効果的に盛り上げている。橋が半分かかったところを水墨で、完成した立派な太鼓橋を大和絵で華やかに見せる展開などはみごとである。

赤羽は墨絵と大和絵の「二刀流」は好きだった宗達の影響かもしれないと語っていた。江戸時代初めに活躍した京都の町絵師・宗達は、琳派の祖といわれる人物だ。町衆の出といわれているが、自ら絵屋を興し、絵に関するあらゆる依頼を引き受けた。平安時代の古典文化を新しい感覚で取り入れ、おおらかで型破りな独自の画風を打ち立てた画家としての姿勢も、赤羽には共感するところがあったのではないだろうか。『かさじぞう』の扇面を用いた画面構成や、『こぶじいさま』（一九六四年）などにみる墨のたらし込み、『へそもち』（一九六六年）の雷の造形などにも宗達の影響を見ることができている。

赤羽が絵本画家としてデビューしてすぐ墨絵と大和絵風の使い分けで絵本を描くことができたのは、日本画家として長く習練を積んでいた時期があったからだ。し

かしそれで留まることなく、赤羽はそれぞれの絵本の主題にもっともふさわしい表現を求めて、日本の伝統的な絵画を研究した。物語絵の源流ともいえる平安時代からの絵巻物や、民衆の間で親しまれた風絵や大津絵などの表現も、独自の解釈で自由に取り入れている。

「私にはカマエはない。自分のワザなど知れたものである。そんなものをヒケラカさず、与えられた主題をどう生かすか、その主題のねらいは何か、それに専念する」<sup>(＊1)</sup>と赤羽はエッセイに記している。物語を視覚的に解釈し、もっともふさわしい絵画表現を考えて、筆を変え、和紙を選んで描かれた赤羽の絵本は、同じ画家の絵とは思えないほどバリエーションに富んでいる。

『したきりすずめ』（一九八二年）は、墨刷りの版本に少ない色数の手彩色を施した江戸初期の丹緑本の形式を取り入れた絵本だ。にじまない墨の線描は『かさじぞう』のよくにじんだ墨線とは対照的で、筆と和紙の違いがよくわかる。彩色は朱と黄、青のみに抑えられ、着物の模様などは紙を切り抜き絵具を刷り込むステンシルのような新たな彩色の手法が用いられている。赤羽はこの一見版画のような簡素な彩色が気に入ったようで、後の絵本

ではこの手法をさらに大胆に使っている。

三巻にわたる『おへそがえる・ごん』（一九八六年）は十二世紀の絵巻「鳥獣戯画」を赤羽流にアレンジした愉快な自作の物語絵本だ。おへそを押すと口から雲が出るかえるの「ごん」が、人間の「けん」や、手のあるへびの「どん」と友だちになり、けんの父親を捜す旅に出る。一卷が百数十頁もある長編で、化け物や山賊を退治しながら物語は進んでいく。人間さながらに活躍するごんの姿は「鳥獣戯画」に登場するかえるに想を得ている。白描ののびやかな線画、横長の頁をめくるとに次々と物語が進行する構成も絵巻を研究するなかで獲得した表現だろう。

国際アンデルセン賞画家賞を受賞したときの挨拶で、赤羽は次のように語った。「私の絵本の特徴は、日本の古い伝統的な美術の美しさに現代的な解釈を加えたものを、次の世代の子どもに伝えたいという気持ちが強く働いたものです」（\*2）。赤羽の絵本は、子どもたちに開かれた日本の美術の入口でもある。

ちひろ美術館で今年予定していた展示会は、感染拡大の影響で来年に延期になった。絵本で楽しむのはもちろ

ん、ぜひ美術館で原画の味わいも堪能してほしい。

（\*1）「八方やぶれの展開」（一九八一年）より

（\*2）国際アンデルセン賞画家賞授賞式挨拶（一九八〇年）より

どちらも『新装版 私の絵本ろん』（平凡社 二〇二〇年）収録